

桑野隆『バフチン』（平凡社新書、2011年）を批判的に読む

——バフチン受容の死点克服のために——

佐々木 寛

本書のように紙数に制約のある新書を学術雑誌で事細かに批判することは、著者に対して公正公平を欠くのではないかとの謗りを、評者は甘受するものです。しかし、新たにバフチンを読もうとするわが国の読者の多くが、おそらくは桑野氏のこの本を手取るだろうことを思うとき、バフチン研究の将来を誤らないためにも、本書を学術雑誌できちんと批判しておくことが必要であると考えます。

桑野氏は本書に先立って、バフチン・サークルのヴォローシノフ、メドヴェージェフの著作の翻訳を行ない、バフチンにかんして一連の著書を刊行、論文集や雑誌特集号を編纂しています。また本書のあとにも、バフチンのドストエフスキー論初版（1929年）の訳を世に問うています*1。評者が以下に行なう批判は、それらの仕事をふまえてのものであることをお断わりしておきます。

本書は「はじめに一エピステーメーの転換」「第一章 不可欠な他者」「第二章 交通のなかの記号」「第三章 ポリフォニーと対話原理」「第四章 脱中心化」「第五章 民衆の笑い」「第六章 カーニヴァル化とグロテスク・リアリズム」「おわりに」という八つの部分からなっています。

著者は「はじめに」で、バフチンが1963年のドストエフスキー論、1965年のラブレ論で行なっているのは、近代化解釈そのものの転換をはかる新たな知の枠組みとしての〈民衆の笑いによる創造〉と〈ポリフォニー・対話原理〉の提示であることを述べたあと、第一章では、1960年代後半にJ.クリステヴァを介してバフチンの名が世界的に知られるに至った経緯を紹介し、1895年オリョールでの出生、ペトログラードでの学生時代、1918年ネーヴェリでの「カント・セミナー」結成（カガン、プンピャンスキー、ヴォローシノフ、ユージナら）、1920年秋から24年春までのヴィテプスク時代（メドヴェージェフの参加）と初期の哲学草稿「行為の哲学によせて」「美的活動における作者と主人公」について説明しています。

続いて第二章では、1924年5月から1930年3月までのレニングラード時代のバフチンと彼のサークルの活動の模様を紹介しながら、〈社会学的方法〉を踏まえた一連の著作——ヴォローシノフ「生活の言葉と詩の言葉」（1926）、同『フロイト主義』（1927）、メドヴェージェフ『文芸学の形式的方法』（1928）、ヴォローシノフ『マルクス主義と言語哲学』（1929）、バフチン『ドストエフスキーの創作の諸問題』（1929）について、記号を介しての交通（送り手と受け手の双方の能動的参与）の観点から論じています。そして第三章では、1929年のドストエフスキー論初版と1963年の第二版を比べながら、バフチンが唱える対話のイデオロギ、それを具現するものとしてのドストエフスキーのポリフォニー小説をめぐる、ポリフォニーと多言語性、メタ言語学、対話的交通としての存在といった問題を論じています。

これに続く第四章では、1930年春にカザフスタンのクスタナイに流刑になったあと、1936-37年にモルドヴァ共和国のサランスクで大学の教員を務めたこと、また小説文体論に取り組んで1935年に草稿「小説の言葉」を完成させたことを伝えて、〈ことばの多様性 *разноречие*〉〈声の多様性 *разноголосица*〉〈言語の多様性 *разноязычие*〉という、バフチンの言語学批判の核心をなす独特な用語について説明を行ない、さらに小説の言葉と詩の言葉、小説発達の二つの路線、悪漢・患者・道化、クロノトポス、多言語と笑いの問題について論じています。次いで第五章では、1937年秋から1945年9月までのキムルイ時代（この間、1940年に学位論文を書き上げる）、サランスクの大学への復職、そして1951年に博士の学位授与が否決されるまでのことが書かれており、1965年のラブレー論に結実することになる民衆の笑いの文化への取り組みの様子が記されています（公式文化と非公式文化、民衆の笑い とベルグソンの笑い、当時のフォークロア評価など）。

そして第六章では、1946年に学位請求論文として提出した「リアリズム史上におけるフランソワ・ラブレー」と1965年のラブレー論を比較しながら、バフチンによるラブレーの記号学的解説について論じ、併せて1963年のドストエフスキー論に見られるメニッペアのジャンルについても解説、さらにバフチンの説くグロテスク・リアリズム（民衆の笑いの文化のイメージ体系）を、ロシア・アヴァンギャルドと軌を一にするものとして論じています。また1946年の学位論文審査の開始から51年に博士号の申請が却下されるまでの経緯を中心にして、1975年に亡くなるまでのことを簡単に紹介しています。

「おわりに」で著者は、バフチンの著作を読んだことのない読者を念頭において彼の全体像を簡潔に紹介することをめざしたために、バフチンに影響を与えた人物たちとの関係や、同時代および後世の思想家たちとの対比には、あえて踏み込まなかったと断っています。またバフチン・サークルの他のメンバーの名前で出ている著作の扱いについても、それらを基本的にはバフチンのものとみなす一方で、バフチン当人名の著作をできるかぎり中心に据えて論じるようにしたと述べています。

バフチン・サークルが提起した記号を介しての交通の問題、1929年初版、63年第2版のドストエフスキー論にみられる対話的交流のイデー、ドストエフスキーの小説のポリフォニー的原理の解明と、そして博士号請求論文として1940年に書かれ、65年によく日の目を見たラブレー論の、民衆的な笑いの世界、カーニバル文化の理論と——この二つを柱にして、バフチンの生涯のそれぞれの時期の著作を検討している点で、本書の構成は基本的には1987年の桑野著『バフチン—〈対話〉そして〈解放の笑い〉』（2002年に新版）^{*2}と同じです。しかし、ソビエト連邦崩壊のあと1990年代にロシアで急速に進展をみたバフチン研究の成果が随所に取り入れられている点で、中味のほうは前著とはちがう新しいものになっています。

本書を読んで評者が疑問に思うのは、大きく言って次の三点です。

- I. 1910年代後半から20年代半ばまでの、哲学者バフチンの思想形成の過程がほとんど論じられておらず、初期バフチンの著作についての説明が貧弱であること。そのために、1920年代後半から30年代にかけてのバフチンの言語哲学、小説言語論への転換がどのようにしてなされたのか、その道筋がよく判らないこと。
- II. バフチン・サークルのヴォローシノフ、メドヴェージェフの著作を問題にする場合に当

然言及しておかなければならない二つの事柄（いずれも1991年のソビエト連邦崩壊後に明らかになった）に、一言も触れていないこと。

Ⅲ. 著者が「第三章 ポリフォニーと対話原理」でドストエフスキー論初版第2部第1章から引いている〈言葉の分類図式〉の箇所、訳のあて方。バフチンの小説言語論の肝やかなめの問題が理解できていないこと。

まず始めに、Ⅰの問題について。

桑野氏は「第二章 交通のなかの記号」の初めの部分で「いずれにせよ、ここまで見たかぎりでのバフチンは、新カント学派やケルケゴール（一八一三-五五）、シェラー（一八七四-一九二八）その他の思想を自分なりに「読み替え」ようとしているものの、いまだ独創的な思想家にはなりえていない。それが大きく変化しはじめるのが、一九二〇年代後半、すなわち三〇歳前後の時期である。」（40頁）と述べています。つまり、1920年代後半にバフチン・サークルのヴォロシノフとメドヴェージェフが〈イデオロギー記号の社会学〉にもとづいて、マルクス主義のスタイルで一連の著作を著わし、バフチンもドストエフスキー論の初版を公にするこの時期に、バフチンは初めて独創的な思想家になったということなのですが、果たしてそれ以前のバフチンには、思想家としての独創性は認められないのでしょうか。

桑野氏は、バフチンがドイツ観念論の哲学を最も正統的に継承している哲学者であることを理解していません。桑野氏の言う「初期バフチン」の三つの草稿「行為の哲学によせて」「美的活動における作者と主人公」「言語芸術作品における内容、素材、形式の問題」の根底にあるのは、行為の哲学、哲学的人間学であって、そこでは、自分にとってのわたし（я для себя）、わたしにとっての他者（другой для меня）、他者にとってのわたし（я для другого）という三項間の関係のできごとと、このできごとにおいてわたしが占める唯一の位置が問題になります。特に草稿「美的活動における作者と主人公」は、哲学的人間学をふまえて他我理解の問題を追求した著作として、わが国の哲学史の脈絡でいうと和辻哲郎『人間の学としての倫理学』（1934）、三木清『哲学的人間学』（1935年頃の校正原稿）、あるいはカール・レーヴィット「共に在る人間の役割における個人倫理的諸問題の人間学的基礎づけのために」（1928）〔邦訳『共同存在の現象学』岩波文庫、2008年〕、さらにはJ-P. サルトルの『存在と無』（1943）、廣松渉『世界の共同主観的存在構造』（1972）あたりまで繋がっています。（バフチンのこの草稿とサルトルを読み比べてみると、評者にはバフチンのほうがより徹底して問題を追及し得ているように思えます。）また1940年代のバフチンの草稿「人文科学の方法によせて」や1960~70年代の一連の覚書を読むとき、哲学者としてのバフチンは1920年代の半ばですでに出来上がっていたとの思いを強くします*³。

「おわりに」で著者が、バフチンに影響を与えた人物たちとの関係や、同時代および後世の思想家たちとの対比には、あえて踏み込まなかったと断わっていることは、当然だと評者も思います。この問題は一朝一夕に論じられるようなものではありません。ただそれでも、バフチンの初期哲学草稿の基本的な考え方について説明することは可能ですし、それが1920年代後半のバフチン・サークルの著作や、1929年のドストエフスキー論初版、そして1930年代の小説言語論、ジャンル論に転換してゆく筋道をたどることも可能です。

バフチンの言語哲学、記号の学が、既存の言語学を超えて「メタ言語学」たり得ている所以は、行為の哲学、哲学的人間学がそのベースにあるからなので、そこでは人間が、置き換え可能な点ではなく、或るふくらみをもった存在（〈かくあるべきわたし〉と〈現にあるわたし〉の落差を生きる意識）として考察されている。そして言葉は、対象を現にあるものとして指示すると同時に、そのイントネーションでもって、対象の〈かくあるべき未来〉をも表現するものとなる。ここには行為の哲学、哲学的人間学から言語哲学、記号の学に転換するための重要な契機が示されています*⁴。さらに、〈わたし〉は世界の敷居ぎわにいて、世界の内に収まり切ってはならず、世界に対置される自らの最後の言葉をつねに留保していることの指摘も、ポリフォニー小説の理論にとって本質的な意味をもちます*⁵。

評者は、1920年代半ばまでの行為の哲学、哲学的人間学から、1920年代末～30年代の言語哲学、小説言語論へのこの転換の問題が、以後のバフチンの仕事を理解するための鍵になると考えています。バフチンのドストエフスキー論の根底に哲学的人間学があることは、1929年初版と63年第2版のいずれにも見られる以下の箇所の叙述からも明らかです。

人間のどんな言動、立ち居振舞いにも、その人のすべてが現れるものである。そして、他者の言葉と他者の意識に対する人間の志向性そのものこそ、実はドストエフスキーの全作品を貫く根本テーマに他ならないのである。主人公の自分自身に対する関係は、彼の他者に対する関係および他者の彼に対する関係と不可分に結びついている。自意識はいつでも自分自身を、彼についての他者の意識を背景として知覚する、つまり、《自分にとっての私》は《他者にとっての私》を背景として知覚されるのである。したがって主人公の自分自身についての言葉は、彼についての他者の言葉の間断なき影響のもとで形成されるのである。

（『ドストエフスキーの詩学』望月哲男・鈴木淳一訳、ちくま学芸文庫、419-420頁）

著者は1919年のバフチン「芸術と責任」について、「日本語訳にして一五〇〇字にも満たないこのエッセイ「芸術と責任」は、バフチンのその後の仕事を理解するうえできわめて重要な位置を占めているといえよう。」（24頁）と述べていますが、このエッセイはバフチンが自らの思想信条を概括的に述べたものに過ぎず、初期バフチンの他の著作のように読者が彼の思考と対話的に向き合うようには書かれていません。初期バフチンの仕事をこの著作でもって代表させることは無理です。

次に、IIの問題について。問題点は二つです。

第一の問題点は、1991年のソビエト連邦崩壊の後に、雑誌『モスクワ』1992年11-12号と『文学修業』1992年4-5号に掲載されたバフチンの1961年1月10日付ヴァジム・コージノフ宛の書簡です。その中でバフチンは、ヴォローシノフとメドヴェージェフの著作について次のように述べています。

始めにまず、あなたのこのあいだのご質問にお答えします。『形式的方法』と『マルクス主義と言語哲学』の二冊を、わたしはよく知っています。V. N. ヴォローシノフとP. N. メドヴェージェフは、今は亡きわが友です。この二冊をつくる際に、われわれはごく緊密なコンタクトの下に作業を行なった。のみならず、この二冊とわたしのドストエフスキー論のあいだには、言語ならびに言語作品についての共

通の考えが存在します。この点で V. V. ヴィノグラードフは全く正しい。言っておかねばならないのは、共通の考えと作業時の緊密なコンタクトが、両著の各々の独自性を貶めるものではないということです。V. N. ヴォロシノフと P. N. メドヴェージェフの他の著作について申せば、それらは別の平面にあって、共通の考えを反映しておらず、その創造にわたしは全く与かっていません*6。

桑野氏がバフチン・サークルの著作について述べる際に、1970～80年代に出来上がった〈バフチン神話〉（バフチンがヴォロシノフ、メドヴェージェフの名前を借りて、マルクス主義のスタイルで一連の著作を公にしたという*7）を覆すきっかけとなったこのバフチンの書簡に一言も触れていないのは、何故なのでしょう。この書簡をめぐる様々な解釈があることも事実ですが*8、ソビエト連邦崩壊後のバフチン研究に根本的な仕切り直しを迫ることになった重要な資料なので、紹介しておくべきだったでしょう。本書50～51頁のバフチン・サークルの著作一覧を「当人名ではでていないが実際にはバフチンが書いた著作、あるいは基本的にはバフチンのものとみなされている著作」（50頁）であるとし、「あるべき「社会学的方法」をめぐる論を、二〇年代後半に仲間名義で次々と発表していった」（52頁）とする桑野氏の記述に対して、評者は〈バフチン神話〉の再生産に手を貸すものとして奇異の感を覚えます。

第二の問題点は、1920年代後半にヴォロシノフとメドヴェージェフが研究員として所属していたレニングラード大学の東西文学・言語比較史研究所（Институт сравнительной истории литератур и языков Запада и Востока）とバフチンの関係です。マルクス主義のイデオロギー学構築をめざすこの研究所で、文芸批評家 V. A. デスニツキー（レーニンとは旧知の間柄で、ゴーリキーの親友だった）の指導の下に、ヴォロシノフとメドヴェージェフはマルクス主義のスタイルで書かれた一連の著作を発表していくわけで、メドヴェージェフの『文芸学の形式的方法』、ヴォロシノフの『マルクス主義と言語哲学』、バフチンの『ドストエフスキーの創作の諸問題』はいずれも、研究所の叢書として刊行されたものでした。この研究所の活動についてメドヴェージェフの子息ユーリー・メドヴェージェフは、版元の倒産で日の目を見ずに終わった《バフチン・サークル》シリーズ（Круг Бахтина）第3巻（メドヴェージェフの巻）の、50頁を超える解説の校正原稿（1995年）のなかで言及。シェフィールド大学バフチン研究センターの Craig Brandist もこの研究所について調査を行ない、*Russian Literature*, LXIII（2008）II／III／IV 掲載の論文を始めとして、研究成果を精力的に発表しています。バフチンのマルクス主義への関わり方を考えるうえで、この研究所の存在は重要な意味をもつはずなのですが、この問題にも桑野氏は本書で全く触れていません*9。

最後に、Ⅲの問題について。

バフチンがドストエフスキー論初版第2部第1章で掲げている小説の言葉の分類図式は、本書第3章の桑野氏の訳では次のとおりです（101-102頁。ただし組版の都合で一部改変）。

- I 話し手の意味上の最終的な審級の表現となっている、直線的・直接的に
対象に向けられた言葉
- II 客体としての言葉（描写された人物の言葉）

- (1) 社会的な類型性が優位な言葉
- (2) 個人的な性格規定が優位な言葉

客体化の度合いはさまざまである。

Ⅲ 他者の言葉を志向する言葉（二声の言葉）

- (1) 一方向の二声の言葉
 - a 文体模倣
 - b 語り手による叙述
 - c（部分的に）作者の審級^{★10}を担った主人公の非客体的な言葉
 - d 一人称の叙述（Icherzählung）

客体性が低下すると、声どうしが融合し、第一タイプの言葉に近づこうとする。

- (2) 多方向的な二声の言葉
 - a あらゆるニュアンスをともなったパロディー
 - b パロディー的な叙述
 - c パロディー的な一人称の叙述（Icherzählung）
 - d パロディー的に描写された主人公の言葉
 - e 他者の言葉をアクセントに変更を加えて伝える

客体性が低下し、他者の審級^{★11}が強まると、内的に対話化され、第一タイプの二つの言葉（二つの声）に分かれようとする。

- (3) 能動的タイプ（投影された他者の言葉）
 - a 隠された内的論争
 - b 論争的色彩をほどこされた自伝や告白
 - c 他者の言葉を意識するあらゆる言葉
 - d 対話の応答のせりふ
 - e 隠された対話

他者の言葉は外側から作用する。他者の言葉との相互関係はきわめて多種多様な形式をとることができるし、また他者の言葉による歪曲の度合いも多種多様である。

この分類図式は1963年刊の第2版にもこのままのかたちで掲げられているもので、語の入れ替えが数箇所ある以外は初版と同じです。

評者が疑問に思うのは、この図式のⅢ(1)の「一方向の二声の言葉」と、Ⅲ(2)の「多方向的な二声の言葉」という訳のあて方です。原文ではⅢ(1)が *Однонаправленное двуголосое слово* そしてⅢ(2)は *Разнонаправленное двуголосое слово* で、これは第2版も同じです。ちなみに、この箇所を新谷敬三郎は(1)「一方向性の複旋律語」、(2)「多方向性の複旋律語」と訳し（M・バフチン『ドストエフスキ論—創作方法の諸問題』、冬樹社、1968年。1974年改版）、望月・鈴木は(1)「一方向性の複声的な言葉」、(2)「多方向性の複声的な言葉」と訳し

ています（ミハイル・バフチン『ドストエフスキーの詩学』、ちくま学芸文庫、1995年）。つまり、新谷訳、望月・鈴木訳、桑野訳のいずれにおいても *однонаправленное* には「一方向の」、*разнонаправленное* には「多方向の」という意味の訳があてられているわけです。

「一方向の二声の言葉」、「多方向的な二声の言葉」とは、そもそもどういう意味なのでしょう。か。「二つの声」が一方向的な言葉、多方向的な言葉という意味なのか、それとも「二つの声の言葉」が一方向的、多方向的という意味なのか（新谷訳、望月・鈴木訳はそう読む以外にない）。そしてそれは、Ⅲ(1)の「a 文体模倣」「b 語り手による叙述」「c（部分的に）作者の志向を担った主人公の非客体的な言葉」「d 一人称の叙述（*Icherzählung*）」と、またⅢ(2)の「a あらゆるニュアンスをともなったパロディー」「b パロディー的な叙述」「c パロディー的な一人称の叙述（*Icherzählung*）」「d パロディー的に描写された主人公の言葉」「e 他者の言葉をアクセントに変更を加えて伝える」と、それぞれどう関係しているのか。著者自身、本当に分かっているのでしょうか。

ロシア語の接頭辞 *одно-* には、「一つの」という意味のほかに、「同じ」という意味があります（例：*одноклассник* 同級生、*одноимённый* 同名の）。そして *разно-* には、「多くの」という意味のほかに、「別々の」という意味があります（例：*разномыслие* 考え方の違い、*разномерный* サイズの異なる）。したがって *однонаправленное* *двуголосое* *слово* は「二つの声が同じ方向の言葉」、*разнонаправленное* *двуголосое* *слово* は「二つの声が別々な方向の言葉」というふうに訳すことが可能です。

バフチンは1959～61年の草稿「テキストの問題」のなかで、作者のことが作中人物のことが描くことの問題を、次のように説明しています。

作中人物のことが属する意味の平面と、作者のことが属する意味の平面とのちがひ。作中人物は、描かれている生の参加者として語る。いわば、部分的な立場から語るわけで、いずれにしろ、その視点がかざられている（作者よりも知るところが少ない）。作者は、描かれている（ある意味では彼の創造した）世界の外にいる。作者はその世界全体を、質的に異なったより高次の立場から理解している。すべての作中人物とそのことが、作者の関係（および作者のことが）の対象となるのだ。

（バフチン「テキストの問題」佐々木寛訳、ミハイル・バフチン著作集第8巻『ことば対話テキスト』新谷・伊東・佐々木訳、新時代社、1988年、218頁）

バフチンがここで言っていることが、初期の草稿「美的活動における作者と主人公」の、〈主人公の生の能動性〉と〈作者の美的能動性＝見る目の余裕〉の関係の問題を、〈作中人物のことが〉と〈作者のことが〉の関係の問題に転換したものであることは、容易に見てとれます。

何かある対象なり事態についての作中人物の言葉は、その対象や事態にたいする彼の評価の声（アクセント、イントネーション）をともなって、他の人物に向けて発せられる。そしてその言葉が、作者によって（作者の言葉で）読者に向けて描かれる。そうやって描かれた作中人物の言葉の一つ一つには、対象や事態にたいする彼の評価（期待、懇願、疑問、拒否 etc.）が声になって響いていると同時に、彼の言葉にたいする作者の評価（共感、同情、懸念、揶揄 etc.）の声も同時に響くことになります。この二つの声と同じ方向をとる時には、

その言葉はⅢの(1)の「文体模倣」「語り手による叙述」「(部分的に) 作者の志向を担った主人公の非客体的な言葉」「一人称の叙述 (Icherzählung)」となる、そして二つの声が別々の方向をとる時には、「あらゆるニュアンスをともなったパロディー」「パロディー的な叙述」「パロディー的な一人称の叙述 (Icherzählung)」「パロディー的に描写された主人公の言葉」「他者の言葉をアクセントに変更を加えて伝える」となるわけです。

バフチンの小説言語論の肝心かなめの問題を理解できていないことが、端なくもこの箇所 of 著者の訳にあらわれているのだらうと評者は考えます。

おわりに

バフチンの対話原理は、行為の哲学、哲学的人間学によって近代のモノローグ的世界像の転換をはかろうとした世界的な潮流の問題であって、1920年代後半のイデオロギー的状况の狭隘化というロシア一国の問題から来たものではありません。カーニバル文化論についても同様で、著者は一言も触れていませんが、ペトログラード大学の若き文献学徒のサークル《Omphalos》、ヨーロッパ文化の知の伝統を継承した学問の道化師たちの、高度の知性と学識に裏付けられた笑いの文化にそれは根差したものです。謹厳実直な哲学者バフチンと、カーニバル的笑いの文化、グロテスク・リアリズムの思想家バフチンとは、いささかも矛盾しません。著者の言う、1930年代の全体主義化する体制への闘いも確かにあったでしょうが、全体として、遠近の見通しを欠いたバフチン案内に叙述が終始している感を否めません。

注

★1 桑野隆のバフチンに関する著書、編著書、訳書の一覧は以下のとおりである。

1. 著書：

桑野隆『バフチン—(対話)そして〈解放の笑い〉』岩波書店、1987年

桑野隆『未完のポリフォニー—バフチンとロシア・アヴァンギャルド』未来社、1990年

桑野隆『バフチン 新版—(対話)そして〈解放の笑い〉』岩波書店、2002年

桑野隆『バフチンと全体主義—20世紀ロシアの文化と権力』東京大学出版会、2003年

桑野隆『危機の時代のポリフォニー—ベンヤミン、バフチン、メイエルホリド』水声社、2009年

2. 編著書：

桑野隆編『ミハイル・バフチンの時空』せりか書房、1997年

『思想 (バフチン再考)』2002年8号、岩波書店

3. 訳書：

V. N. ヴォロシノフ、M. M. バフチン『マルクス主義と言語哲学—言語学における社会学的方法の基本的諸問題』桑野隆訳、未来社、1976年

ミハイル・バフチン『芸文学の形式的方法』桑野隆・佐々木寛訳、新時代社、1986年

ミハイル・バフチン『マルクス主義と言語哲学—言語学における社会学的方法の基本的問題 [改訳版]』桑野隆訳、未来社、1989年

ミハイル・バフチン『バフチン言語論入門』桑野隆・小林潔編訳、せりか書房、2002年

ミハイル・バフチン『ドストエフスキーの創作の問題』桑野隆訳、平凡社ライブラリー、2013年

★2 番場俊は本書の書評「桑野隆『バフチン カーニヴァル・対話・笑い』平凡社新書、2011年」

（表象文化論学会ニューズレター『REPRE』Vol.15、2012年）の中で、1987年刊のこの本と、クラーク、ホルクイストのバフチン評伝について次のように記している。

「1987年に初版、2002年に新版が出た旧著『バフチン』は、長らく日本のバフチン研究のスタンダードだった本である。その後もバフチンの入門書らしきものは何冊も出たが、結局、これに勝るものはなかった。クラークとホルクイストの評伝（『ミハイール・バフチーンの世界』川端香男里・鈴木晶訳、せりか書房）とあわせた二冊を読むことが、とにかくバフチンを「ちゃんと」知るための出発点だったのである。」

桑野隆著『バフチン』岩波書店、1987年初版、2002年新版が「長らく日本のバフチン研究のスタンダードだった」との認識は、新時代社版ミハイール・バフチン著作集全8巻（1979-1988年）、ついで水声社版ミハイール・バフチン全著作（全8巻を予定。これまでに第1巻1999年、第5巻2001年、第2巻2005年、第7巻2007年を刊行）の翻訳と編集の仕事に携わってきた評者には無い。他の訳者たちに尋ねても、答えは同じであろう。バフチン研究のスタンダードと呼べるような本はわが国ではまだ書かれていない、というのが評者の率直な所見である。

クラーク、ホルクイストによるバフチンの評伝（Katerina Clark and Michael Holquist: MIKHAIL BAKHTIN, Harvard University Press, 1984. 邦訳は1990年）は確かに面白い本だが、1989年秋に早稲田大学の招きで来日したモスクワ、ソビエト科学アカデミー世界文学研究所のヴァジム・コージノフは、同大学での講演で、この本について以下のようにコメントしていた。(1)この本の中のバフチンに関する情報の9割は自分から出ている。(2)自分はホルクイストのロシア語聴解能力に疑問をもっている。事実関係の誤りが、どのページにも3、4箇所は見つかるので。〔以上の話は、評者が1997年夏にモスクワのコージノフ氏宅を訪ねたときにも聞かされた。その際に氏は、自身のバフチン観について「バフチンはマルクス主義者ではない。ロシア正教の信仰に根ざした宗教的実存哲学者です。」と述べ、さらに「自分が保守主義者であるとするならば、バフチンは反動思想家ですよ。」と言って笑っていた。〕

- ★3 バフチンのドストエフスキー論第2版（1963年）を出すためにヴァジム・コージノフ、ゲオルギー・ガチュエフと共に尽力、1979年にバフチンの論文集『言語芸術作品の美学』を編集刊行し、ロシア科学アカデミー版ミハイール・バフチン全著作全6巻（1996-2012）の編纂をコージノフと共に主導した世界文学研究所のセルゲイ・ボチャロフ氏のお宅に、評者は1994年8月に二度うかがう機会があった。その二度目の訪問の折に、氏は自らのバフチン観を次のように語ってくれた。「バフチンの哲学は1920年代半ばまでに出来上がっていて、そのあと晩年まで変わっていない。ただし、1920年代半ばの美学草稿には交通の問題が抜けている。作者と主人公と読者のあいだの交通の問題が打ち出されるのは、1920年代後半の友人名義の著作、1929年のドストエフスキー論、1930年代の小説言語論によってである。」

「友人名義の著作」の問題を別にすれば、評者は基本的にこの見方に賛成である。

- ★4 草稿「行為の哲学によせて」の以下のくだりは、イントネーションの問題がバフチンの哲学の核心部分に届いていて、しかもその後の言語哲学、記号の学への転換を予告している箇所として重要である（拙稿「バフチンにおける「声」の問題」、新谷敬三郎教授古希記念論文集『交錯する言語』、名著普及会、1992年を参照）。

「できごととは、関与的にかかわることによって初めて描写することができる。このできごととしての世界は、単なる存在としての世界、所与としての世界ではない。いかなる対象、いかなる関係も、そこでは単に与えられたもの、すっかり存在するものとしてではなく、それらとむすびついた課題「かくあるべし」「望ましい」とともに与えられている。絶対的に無関心な、すっかりでき上がった対象というものは、現実には意識されないし体験もされない。

対象を体験するとき、それによってわたしは対象に対するなにごとかを遂行するのである。対象は、課題と関係を取りむすび、対象へのわたしの関与のもと、その課題のなかで成長するのである。純粋な所与というものは、体験されることがない。わたしが現実に対象を体験するかぎり、たとえば思考として体験するときでも、対象は、遂行されつつある思考という体験のできごとの可変的な要因となる。つまり課題としての性質を帯びる。より正確には、何らかのできごとの統一のうちに置かれる。そこでは課題と所与、存在と当為、存在と価値の要因が不可分なのである。これらの抽象的カテゴリーはどれもみな、そこではある生きた、具体的な、一目瞭然の唯一の全体——すなわち、できごと——を構成する要因なのである。これと同じく、生きた言葉、十全な言葉もまた、すっかり与えられた対象というものを知らない。対象について語ることでもってすでに、わたしは対象に対して無関心でないある種の積極的な態度をとることになり、このため言葉は単に対象を現に有るものとして指示するだけでなく、そのイントネーションで（現実に発せられた言葉はイントネーションを付与されずにはいない。イントネーションは発語という事実そのものに根ざしているのである）対象に対するわたしの価値的な関係、対象のなかの望ましいものと望ましくないものを表現することになり、これによって対象を課題のほうに動かし、生きたできごとの要因たらしめるのである。現実に体験されるものはすべて、所与としても課題としても体験され、イントネーションを付与され、情動・意志的トーンをもち、われわれ〔わたしと対象〕を包むできごとの統一のなかでわたしとの積極的な関係に入るのである。〕

（バフチン「行為の哲学によせて」佐々木寛訳、ミハイル・バフチン全著作第1巻、水声社、1999年、56-57頁）

この箇所前半部分でバフチンが言っているのは、こういうことだ。世界のなかで行為する主体にとって、世界は「できごと」として立ち現われる。そこでは行為の対象が課題とともに与えられており、対象の体験というできごとのなかで、対象は課題とともに成長する（それは、対象を体験する主体が〈かくあるべきわたし〉と〈現にあるわたし〉の落差を生きていることの裏返しである）。続いて後半部分では、世界のなかで行為する主体の問題が、発語における声の問題に転換されている。対象の体験というできごとはそっくり、生きた言葉となって表現され、そこでは言葉が、現にある対象を指示すると同時に、そのイントネーションでもって「対象のなかの望ましいものと望ましくないものを表現する」ことになるのである。

課題に照らしての対象の評価をイントネーションで表現するというこの問題は、1924年に雑誌に掲載するために書かれて結局日の目を見なかったバフチンの論文「言語芸術作品における内容、素材、形式の問題」の、例えば次の箇所につながっている。

「言葉を生み出す活動は言葉のイントネーションの側面に浸透し、そこで自己を評価として意識する。この能動的イントネーションの感覚のうちに、みずからの評価を実現するのである。言葉のイントネーションの側面とは、われわれの理解では、言表の内容に対する話者のありとあらゆる評価的關係（心理学の用語で言えば、話者の多様な情緒的・意志的反応）を表わす言葉の能力である。その際に、言葉のこの側面は、実際に発せられた言葉のイントネーションによって表現されるにせよ、あるいはただ可能性として体験されるだけにせよ、いずれにしる美的な重みをになっているのである。作者の能動性は、表現された評価の能動性となる。その評価は言葉のあらゆる側面を彩る。すなわち言葉は罵り、いとおしみ、関心を示さず、見くびり、飾りたてなどするのである。」

（バフチン「言語芸術作品における内容、素材、形式の問題」伊東一郎訳、同上書、448頁）

この論文に先立って書かれた草稿「美的活動における作者と主人公」でバフチンが論じていたのは、内側から生きられた主人公の生の世界（生の能動性）と、これを外側から完結させて存在の新たな平面に生み出す作者の見る眼の余裕（美的能動性）という、次元の異なる二つの能動性が出会いがかたちづくる、美的できごととしての作品という問題だった。言語芸術作品の美学を論じた1924年のこの論文でも、問題設定の枠組みは同じであって、そこには作者と主人公（作品世界）と読者のあいだの交通の問題はまだ見られない（バフチン・サークルの著作でそれが打ち出されるのは1926年のヴォロシノフ論文「生活の言葉と詩の言葉」からである）。それでも言語芸術の直接の「素材」である言葉を取り上げて、言葉の「内容」面と、それに対する作者の能動的評価の表現としてのイントネーションというふうに「形式」の問題を立てることによって、言語哲学、記号の学に移行する準備をバフチンが整えつつあったことがわかる。

次に、バフチンが人間を、置き換え可能な点ではなく、或るふくらみをもった存在として考察していることについて。これは、草稿「美的活動における作者と主人公」第四章の次のような叙述からも明らかである。

「わたしが価値的に能動的に自分の体験を記憶するのは、体験の個別的な現にある内容の面ではなくて、体験の課せられた意味と対象の面からである。つまり、わたしの中で体験の出現を意味づけていたものの面からである。そしてこれによってわたしは、個々の自分の体験の、課せられた状態を新たに更新し、すべての自分の体験を、自分のすべてを、過去ではなくて、いつも眼前にある未来に集約する。わたし自身にとってわたしの統一は、いつも眼前にある未来の統一である。それはわたしに与えられており、また与えられていない。それはわたしの能動性の切っ先で不断にわたしによって獲得される。それはわたしの資産と所有の統一ではなくて、欠如と非所有の統一である。わたしの既に在るものの統一ではなくて、未だ存在しないものの統一である。」

（バフチン「美的活動における作者と主人公」第四章、佐々木寛訳、同上書、266頁）

人間の〈わたし〉を統一しているものは、〈現にあるわたし〉ではなくて、眼前にある未来の〈かくあるべきわたし〉であること。〈かくあるべきわたし〉と〈現にあるわたし〉の落差を生きるこの意識が、別の意識と出会うさまをどのように記述すればよいのかということ——行為の哲学、哲学的人間学から言語哲学、記号の学へのバフチンの転換とは、そういう問題であったと思われる。

最後に、草稿「美的活動における作者と主人公」で提起した、主人公の生の能動性と作者の見る眼の余裕（美的能動性）の出会いがかたちづくる美的できごととしての作品という問題を、1935年の論文「小説の言葉」（刊行は1975年）でバフチンがどのように発展させているのかを見ておく。

「描写されることばを枠付けするコンテクストが、言語の像の創造において果たす役割は、最も重要な意義を持っている。枠付けするコンテクストは、彫刻家の彫刻刀のように、他者のことばの境界を浮き彫りにし、言語生活の、なまの経験から言語像を刻み出す——コンテクストは、描き出される言語そのものの内的志向性を、その言語の客体的な規定と融合させ、結合するのである。他者のことばを描き出し、枠付ける作者の言葉は、他者のことばの遠景を創造し、影と光とを分配し、そのことばが響く状況とあらゆる条件とを作りだし、最後にそのことばの中に内部から浸透し、その中に自己のアクセントと自己の表現とを導入し、そのことばに対してそれを対話化する背景を作り出す。」

別の言語を描写する言語は、その言語の外部と内部において同時に響くことができ、それについて語る可以同时に、その言語で語ることも、その言語と語ることもできる。また他方では、描き出される言語は同時に描写の対象となることも、自ら語ることもできるが、まさに言語のこのような諸能力によって、諸言語の特殊な小説的イメージの創造が可能となる。」(ミハイル・バフチン『小説の言葉』伊東一郎訳、平凡社ライブラリー、184頁)

バフチンの小説言語論の勘所は、Ⅲの問題で本文中に引いた草稿「テキストの問題」の引用箇所からも分かるように、作中人物のことが作者のことがによって描かれるという点にある。上の引用の前半部分は、初期の美学草稿で提起した問題を言語論的に言い換えたものと言ってよく、「描き出される言語そのものの内的志向性」というのは、内側から生きられた主人公のことが、生の能動性のことである。これに対して作者の見る眼の余裕は、「描写されることを枠付けするコンテクスト」をつくり出し、主人公の言語の内的志向性を「その言語の客体的な規定と融合させ、結合する」のである。また、作者の言葉が他者の「ことばの中に内部から浸透し、その中に自己のアクセントと自己の表現とを導入し、そのことばに対してそれを対話化する背景を作りだす」のは、作者(=観照者)が、感情移入によって主人公の生の能動性になり切ると同時に、見る眼の余裕によってそれに形式を付与し、美的に完結させることに他ならない。

引用の後半部分は、バフチンの小説言語論の精髓ともいべき箇所であって、小説の地の文を分析し、作者と語り手と主人公(作品世界)の関係を検討する際に念頭に置かなければならない数々の問題が、ここには凝縮して示されている。熟読玩味すべき叙述である。

- ★5 世界の敷居ぎわにいて、世界に対置される自らの最後の言葉をつねに留保している〈わたし〉について、バフチンは「美的活動における作者と主人公」第三章と第四章で、その空間的、時間的な在り方を次のように説いている。まず空間的な在り方について。

「自分にとってのわたしは、外界にすっかり属してはおらず、わたしの内にはつねに、わたしが外界に対置することのできる何か本質的なものがある。ほかでもない、わたしの内的な能動性、わたしの主観性がそれであって、客体である外界にそれは対立しており、外界とは混じり合わない。わたしのこの内的能動性は、自然外的であり、世界外的であって、わたしはつねに、世界の〔原文判読不能〕の行為において、内的自己体験の方向での出口をもつ。いわば、抜け道をもつのであって、それによってわたしは、そっくり自然の所与たることから自己を救出するのである。他者は〔原文判読不能〕世界と親密にむすびついており、わたしは、自分の内的、世界外的な能動性とむすびついている。〈中略〉わたしはどのような外的状況にも、完全に入りきってしまうことも、それによって尽くされることもない。自分にとってのわたしはいかなる所与の状況に対しても、いわばその接線上に在る。わたしのなかで空間的に与えられているものはすべて非空間的な内的中心に引きつけられ、他者のなかの観念的なものはすべて、彼の空間的な所与に引きつけられるのである。」

(バフチン「美的活動における作者と主人公」第三章、佐々木寛訳、前掲書、166-167頁)

他者にとってのわたし(外側から見られたわたし)は空間的に所与の状況に完全に収まっているのに対して、自分にとってのわたし(内側から生きられたわたし)は、所与の状況の接線上にいて、いわばその状況を包むものとしてある。引用部分最後の「非空間的な内的中心」というのは、自分と世界との敷居のこちら側にあるわたしの〈われ〉、〈心〉と呼ばれるものである。これに対して他人の〈われ〉、〈心〉は、空間的に完結した彼の身体の内にあるものとしてわたしに体験されるのである。

次に、時間的な在り方について。

「自分にとってのわたしは全部が時間の中にはなく、「わたしの大部分は」直観的に、如実に時間の外でわたしに体験される。わたしには意味のうちに直接与えられた基盤がある。この基盤は他者を問題にするとき、わたしには直接与えられない。他者をわたしはそっくり時間の中に置くが、自分をわたしは行為の中で、時間を包むものとして体験する。わたしは時間を基礎づける行為の主体として時間の外にある。他者は客体としてつねにわたしに対立する——彼の外的な形象は空間の中にあり、彼の内的な生は時間の中にある。わたしは主体として決して自分自身と一致することがない。自己意識の行為の主体であるわたしは、この行為の内容の枠を越えている。これは抽象的な臆断ではなく、わたしによって直観的に体験される、わたしによって確保される、時間からの抜け道、すべての所与、有限なかたちで現存するもの——その中でわたしは自分のすべてを如実に体験しはしない——からの抜け道なのである。」（同、第四章、246頁）

自分にとってのわたしが、空間的には世界の敷居ぎわにいて、世界の内に収まり切らないのと同じように、時間的にもわたしは、内側から生きられた行為する意識、精神（Geist）として、他者の心（Seele）のように時間の中に収まることなく、その大部分が時間の外にあるもの、時間を包むものとしてわたしに体験されるのである。

空間的、時間的に世界の敷居ぎわにいて、世界に対置される最後の言葉をつねに留保しているわたし——それがヴォロシノフの『マルクス主義と言語哲学』（1929）では、自らに差し向けられた記号に対して能動的に記号を対置することで、その意味、価値を理解するわたしになる。そしてバフチンの『ドストエフスキーの創作の諸問題』（1929）では、作者の言葉の単なる客体ではない、それぞれの世界をもった複数の対等な意識たち（作者の言葉と肩をならべる作中人物の言葉、声）の関係が作り出す、ドストエフスキーの小説の独特な構造を、作品を構成する言葉の機能の問題として解明したポリフォニー小説の理論が打ち出されるのである。

- ★ 6 Из писем М. М. Бахтина // Москва. 1992. No.11-12. С.176.; Письма М. М. Бахтина // Литературная учеба. 1992.No.4-5. С.145. [「М.М. バフチンの手紙より」、『モスクワ』1992年11-12号、176頁；「М.М. バフチンの手紙」、『文学修行』1992年4-5号、145頁] 佐々木訳。

- ★ 7 1970～80年代に出来上がったこの〈バフチン神話〉は、次の二著に由来すると言ってよい。

Вяч. Вс. Иванов, Значение идей М. М. Бахтина о знаке, высказывании и диалоге для современной семиотики // Труды по знаковым системам VI, Тарту, 1973 [Vy・Vs・イワーノフ「М. М. バフチンの記号・発話・対話に関する思想が現代記号論に対して持つ意義」、『記号体系論集』第6巻、タルトゥー、1973年。邦訳は、V. イワーノフ「文化の記号論とバフチン（上）、（下）」北岡誠司訳、青土社『現代思想』1979年2月号、3月号]

Katerina Clark and Michael Holquist: MIKHAIL BAKHTIN, Harvard University Press, 1984. [邦訳は『ミハイール・バフチンの世界』川端香男里・鈴木晶訳、せりか書房、1990年]

評者は1995年6月にモスクワで開かれた第7回国際バフチン学会で、1992年にヴィテプスクで創刊されたバフチン研究誌『対話、カーニバル、時空間』編集長のN. A. パニコフに初めて会い（1994年秋から手紙を交換）、そのすぐ後にヴィテプスクで開かれた第1回バフチン学会に招かれて参加。そこでウラジーミル・アルパートフ（モスクワ、科学アカデミー東洋学研究所）、P. N. メドヴェージェフの子息のユーリー・メドヴェージェフ（サンクトペテルブルク、映画雑誌『オーロラ』編集長）と知り合い、以後、バフチン・サークルの著作をめぐる問題について、折あるごとに意見を交換してきた。2012年9月に評者がサンクトペテルブルクのメドヴェージェフ氏宅を最後に訪ねた際に（氏は翌13年10月11日に逝去）、ヴォロシノフ、メド

ヴェージェフの著作はバフチンが書いたものであるとする説が1970年代初めに打ち出された件について、あれはモスクワだから可能だったことで、メドヴェージェフ（1938年に逮捕・銃殺）のことをよく知る者たちがまだ多数生きていたレニングラードでは生まれる筈のない話だった、と語っていた。

- ★8 評者が2001年7月にポーランドのグダンスクで開かれた第10回国際バフチン学会に参加した後、モスクワでN. A. パニコフに会った際に、彼は1961年1月10日付のこの手紙について、バフチンはこの時点ではまだコージノフに会っておらず、二人のあいだに十分な信頼関係ができていなかったため、手紙でどこまで本当のことを書いているか疑わしい、と語っていた。

評者は、アカデミー版バフチン全著作第4巻の編集を担当した世界文学研究所のI. L. ポボーヴァ女史に2012年9月にモスクワで会い、バフチンのこの手紙のことを聞いてみた。女史はバフチン・サークルの著作をめぐる問題について、「関係者がまだ生きていますので、自分はこの問題には関わらないようにしている。」と断わったうえで、「手紙にそう書いているのだから、バフチンはこう言っている、と記せばよいのです。」と答えてくれた。

- ★9 桑野は『バフチン—〈対話〉そして〈解放の笑い〉』岩波書店、1987年（2002年新版）の144頁で、ヴォローシノフと研究所の関係に数行触れているけれども、研究所の性格や、そこでの彼の活動については何も述べていない。2002年新版の新注15で、下記のN.L. ワシーリエフ論文（1995年）その他から得た情報として、ヴォローシノフの伝記的事実について述べているが、研究所との関係にはたった1行触れているだけである。

レニングラード大学の東西文学・言語比較史研究所とヴォローシノフ、メドヴェージェフの関係について評者が参照し得た研究は以下の5点である。

Васильев Н. Л. В. Н. Волошинов. Биографический очерк // Волошинов В. Н. Философия и социология гуманитарных наук. СПб.: Аста-пресс ltd, 1995.

Медведев Ю. П. Павел Николаевич Медведев. Биографический очерк. (Корректурные листы, 1995.)

Алпатов В. М. Волошинов, Бахтин и лингвистика. М., Языки славянских культур, 2005.

Craig Brandist Sociological Linguistics in Leningrad: The Institute for The Comparative History of The Literatures and Languages of The West and East (ILIAZV) 1921-1933, Russian Literature, LXIII (2008) II / III / IV.

Васильев Н. Л. История вопроса об авторстве "спорных текстов", приписываемых М. М. Бахтину // Хронотоп и окрестности. Юбилейный сборник в честь Николая Панькова. Уфа, Вагант, 2011. С.68-105.

- ★10 この箇所、「作者の審級」とあるのは誤りで、正しくは「作者の志向」（1929年版の原文は авторских интенций）。平凡社ライブラリー版のバフチン『ドストエフスキーの創作の問題』桑野訳では「作者の志向」となっている。1963年第2版の原文は авторских замыслов で、新谷敬三郎訳（冬樹社 1968年、1976年改版）は「作者の構想」、望月哲男・鈴木淳一訳（ちくま学芸文庫 1995年）は「作者の意図」。

なおロシア科学アカデミー版バフチン全著作第6巻222頁の、ドストエフスキー論第2版のこの図式には、信じられないような誤植がいくつも見られるので要注意。

- ★11 この箇所、「他者の審級」とあるのは誤りで、正しくは「他者の志向」（1929年版の原文は чужой интенции）。平凡社ライブラリー版の桑野訳では「他者の志向」となっている。なお1963年第2版の原文は чужой мысли で、新谷訳、望月・鈴木訳は「他者の思想」。

（2014年10月31日受理、12月3日掲載承認）